

1952

1952

BY

JICA LIBRARY



1038849[4]

タイ王国

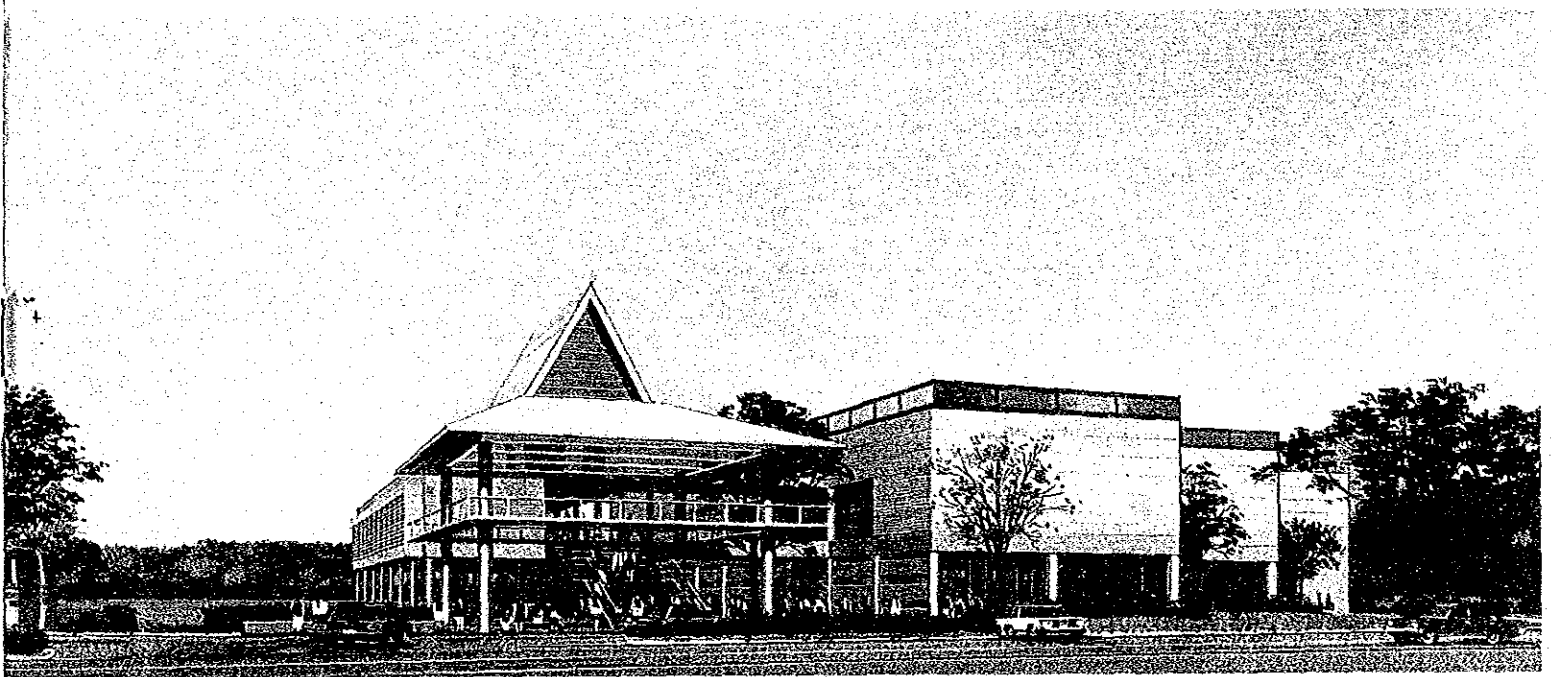
アユタヤ歴史資料館建設計画

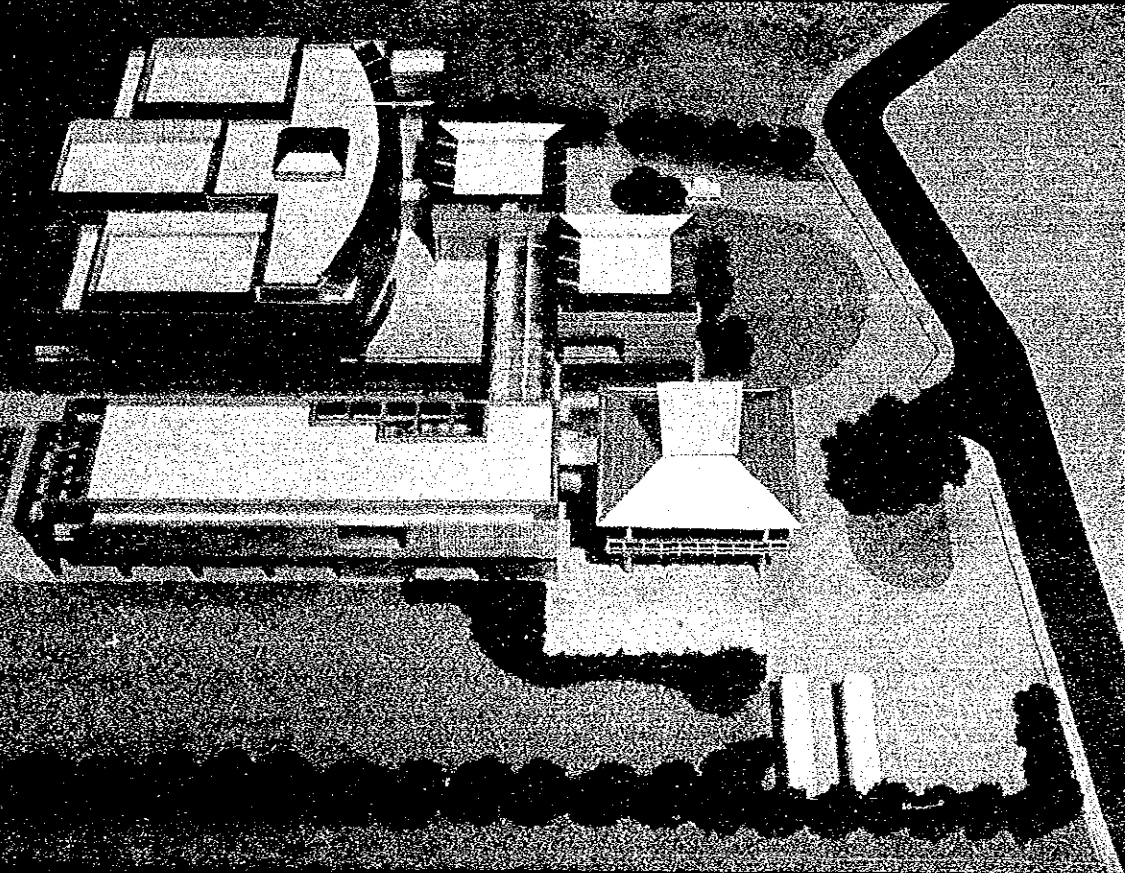
基本設計調査報告書

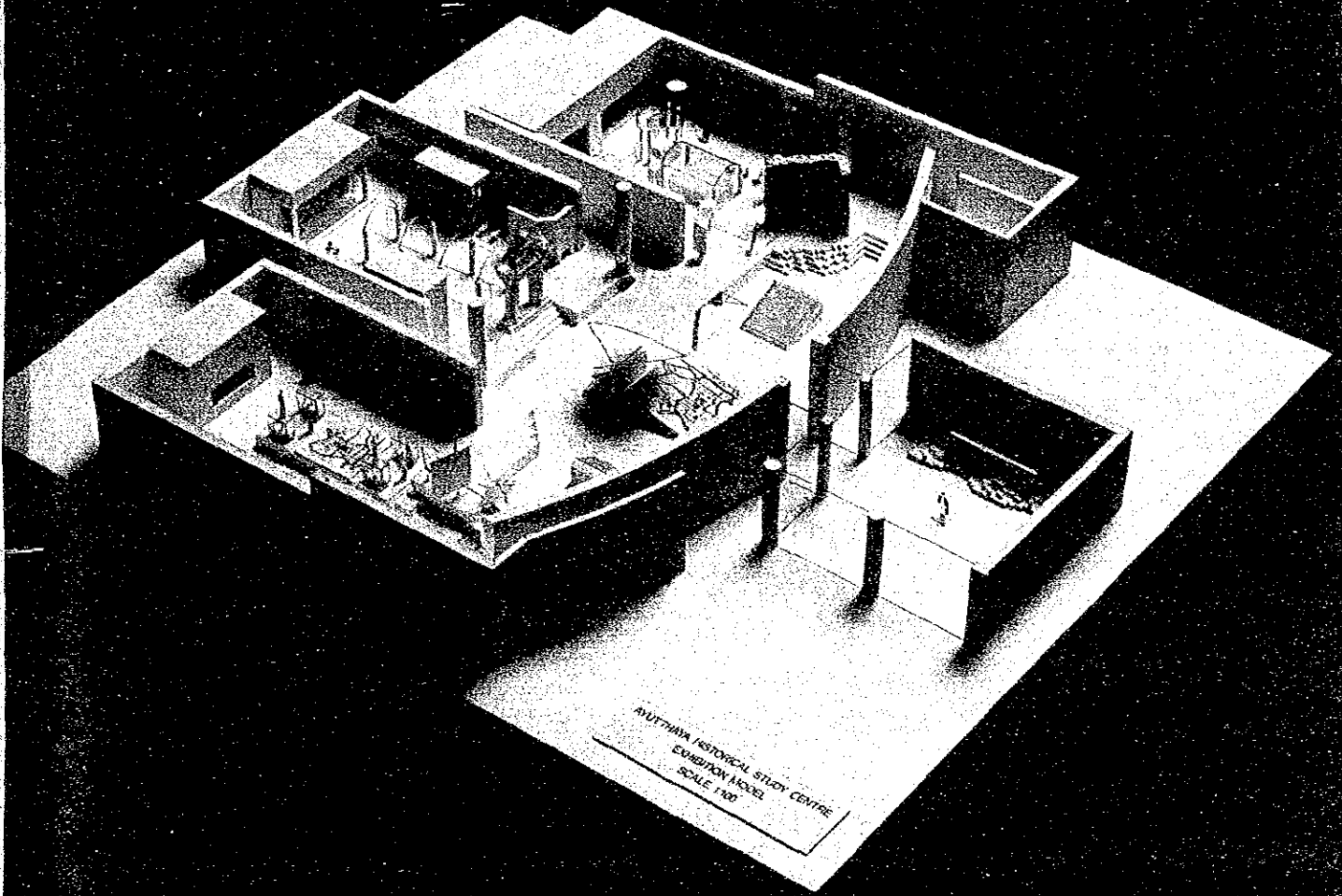
昭和62年9月

国際協力事業団

国際協力事業団		
受入 月日	'87.10.13	122
登録 No.	16835	18
		GRS







AYUTTHAYA HISTORICAL STUDY CENTRE
EXHIBITION MODEL
SCALE 1:100

序文

日本国政府は、タイ王国政府の要請に基づき、同国のアユタヤ歴史資料館建設計画にかかる基本設計調査を行うことを決定し、国際協力事業団がこの調査を実施した。

当事業団は、昭和62年3月25日より5月31日まで、外務省経済協力局無償資金協力課首席事務官花田 吉隆氏を団長とする基本設計調査団を現地に派遣した。

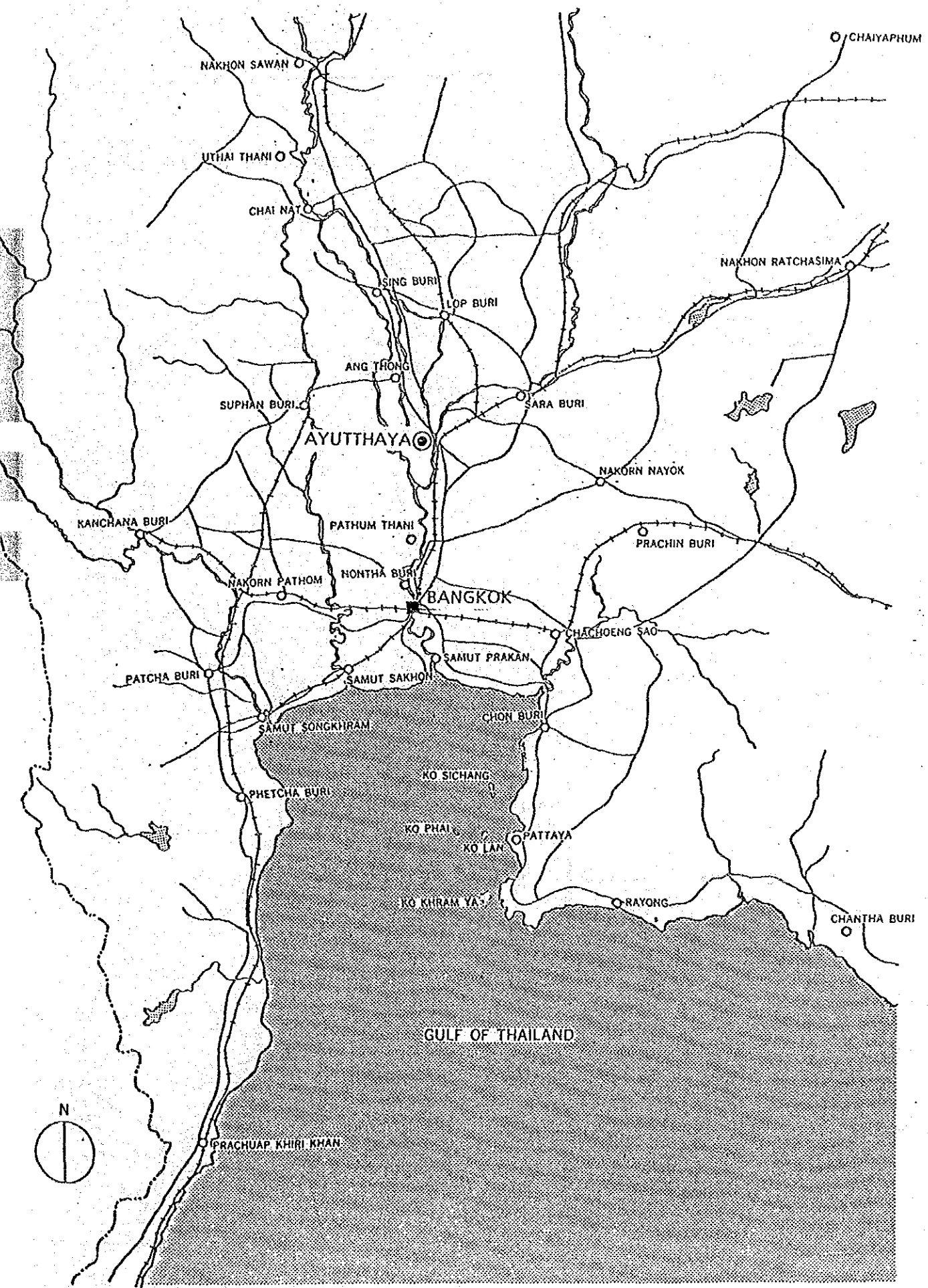
調査団は、タイ国政府関係者と協議を行うとともに、プロジェクトサイト調査及び資料収集等を実施した。帰国後の国内作業の後、当事業団無償資金協力計画調査部基本設計調査第二課課長代理 中村 俊男を団長として昭和62年8月5日より8月12日まで実施されたドラフト・ファイナル・レポートの現地説明を経て、ここに本報告書完成の運びとなった。

本報告書が、本プロジェクトの推進に寄与するとともにタイ国の歴史教育並びに研究の振興に成果をもたらし、ひいては両国の友好・親善の一層の発展に役立つことを願うものである。

終りに、本件調査にご協力とご支援をいただいた関係各位に対し、心より感謝の意を表すものである。

昭和62年9月

国際協力事業団
総裁 有田 圭輔



NAKHON SAWAN

CHAIYAPHUM

UTHAI THANI

CHAI NAT

NAKHON RATCHASIMA

SING BURI

LOP BURI

ANG THONG

SUPHAN BURI

SARA BURI

AYUTTHAYA

NAKORN NAYOK

KANCHANA BURI

PATHUM THANI

PRACHIN BURI

NAKORN PATHOM

NONTHA BURI

BANGKOK

CHACHOENG SAO

PATCHA BURI

SAMUT SAKHON

SAMUT PRAKAN

SAMUT SONGKHIRAM

CHON BURI

PHETCHA BURI

KO SICHANG

KO PHAI

KO LAN

PATTAYA

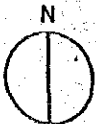
KO KHIRAM YA

RAYONG

CHANTHA BURI

GULF OF THAILAND

PRACHUAP KHIRI KHAN

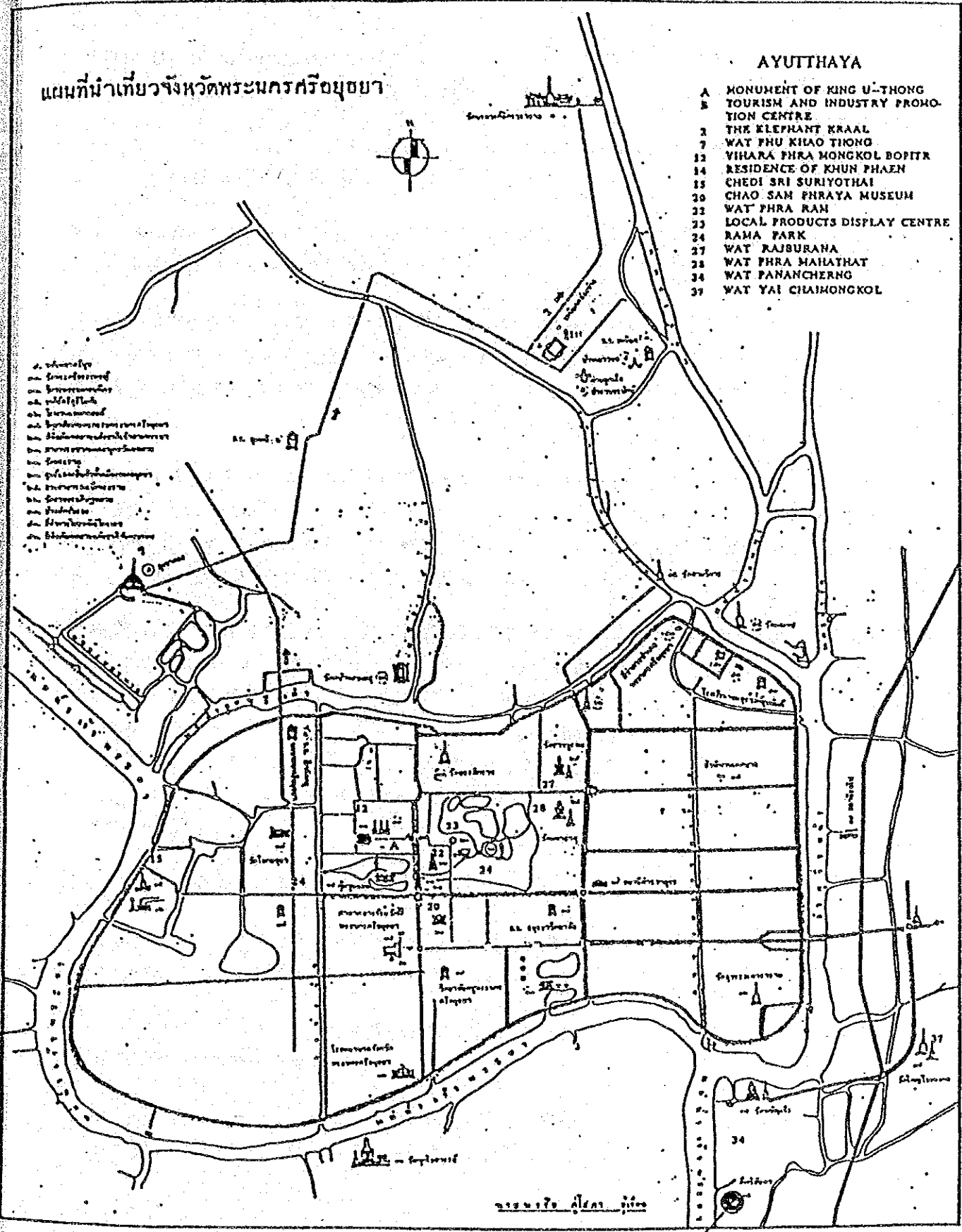


แผนที่นำเที่ยวจังหวัดพระนครศรีอยุธยา

AYUTTHAYA

- A MONUMENT OF KING U-THONG
- B TOURISM AND INDUSTRY PROMOTION CENTRE
- 1 THE ELEPHANT KRAAL
- 7 WAT PHU KHIAO TIHONG
- 12 VIHARA PHRA MONGKOL BOPITR
- 14 RESIDENCE OF KHUN PHAEN
- 15 CHEDI SRI SURIYOTHA
- 20 CHAO SAM PHRAYA MUSEUM
- 23 WAT PHRA RAM
- 23 LOCAL PRODUCTS DISPLAY CENTRE
- 24 RAMA PARK
- 27 WAT RAJSURANA
- 28 WAT PHRA MAHATHAT
- 34 WAT PANANCHERNG
- 37 WAT YAI CHAIMONGKOL

- ๑. วัดมหาธาตุ
- ๒. วัดราชบูรณะ
- ๓. วัดราชโอรสาราม
- ๔. วัดพนมราช
- ๕. วัดมหาธาตุ
- ๖. วัดราชโอรสาราม
- ๗. วัดราชบูรณะ
- ๘. วัดราชโอรสาราม
- ๙. วัดมหาธาตุ
- ๑๐. วัดราชโอรสาราม
- ๑๑. วัดราชบูรณะ
- ๑๒. วัดราชโอรสาราม
- ๑๓. วัดมหาธาตุ
- ๑๔. วัดราชโอรสาราม
- ๑๕. วัดราชบูรณะ
- ๑๖. วัดราชโอรสาราม
- ๑๗. วัดมหาธาตุ
- ๑๘. วัดราชโอรสาราม
- ๑๙. วัดราชบูรณะ
- ๒๐. วัดราชโอรสาราม
- ๒๑. วัดมหาธาตุ
- ๒๒. วัดราชโอรสาราม
- ๒๓. วัดราชบูรณะ
- ๒๔. วัดราชโอรสาราม
- ๒๕. วัดมหาธาตุ
- ๒๖. วัดราชโอรสาราม
- ๒๗. วัดราชบูรณะ
- ๒๘. วัดราชโอรสาราม
- ๒๙. วัดมหาธาตุ
- ๓๐. วัดราชโอรสาราม
- ๓๑. วัดราชบูรณะ
- ๓๒. วัดราชโอรสาราม
- ๓๓. วัดมหาธาตุ
- ๓๔. วัดราชโอรสาราม
- ๓๕. วัดราชบูรณะ
- ๓๖. วัดราชโอรสาราม
- ๓๗. วัดมหาธาตุ
- ๓๘. วัดราชโอรสาราม
- ๓๙. วัดราชบูรณะ
- ๔๐. วัดราชโอรสาราม



要約

タイ国政府は、国家経済社会開発5ヶ年計画において、社会教育・生涯教育の充実、文化保存、伝統文化と近代文化の融合等に重点を置いた教育政策をかけた、これを推進している。

教育の場のひとつとして博物館があるが、タイにおける博物館の現状は一般的に展示内容を理解させるという面から十分整備されているとはいえない。

近年タイ国内の各地では遺跡発掘調査が行われ、国民の歴史、文化的知識を高め、タイ国民たる誇りを培うことをタイ国政府は意図している。

タイの長い歴史の中でも1350年から1767年までの417年にわたるアユタヤ時代は、社会、経済、文化、外交面において重要な時代のひとつであるが、そのアユタヤ文明の証となる歴史的価値のある遺物や発掘品の一部は国立の博物館に収蔵されているが、大半は国内、国外へ散逸してしまっている。

このような背景のもとで、タイ国政府はアユタヤ文明を、綿密な研究によって解明された歴史的事実に基づき近代的展示技法、技術をもって再現し、国民に正しく理解させ、知識を深めるための教育の場としてアユタヤ文明ゆかりの地のひとつである旧日本人町跡地に歴史資料館の建設を計画し、その実現のため我が国政府に対して無償資金協力の要請を行った。

日本国政府は、この要請を受け、国際協力事業団(JICA)を通じ、昭和61年8月から昭和62年8月の間二回にわたる事前調査団、及び二回にわたる基本設計調査団をタイ国へ派遣し、タイ国政府関係者、アユタヤ小委員会(チャイワット・アユタヤ県知事を委員長とし、行政、学会などから25名で構成)、タスクフォース(パイソット内務省常任法律顧問を委員長とし、アユタヤ小委員会の内の11名で構成)、学術委員会及びタイ建築家との協議を重ね、プロジェクトの背景、要請内容の確認、展示内容、必要な施設内容、規模、建物様式の設定及びタイ側の実施体制、維持管理の確認等を行った。

本歴史資料館の機能及び活動内容は以下の三点である。

- 資料館はタイ国民及びそこを訪れる外国人に対し、展示と資料館の諸活動を通じてアユタヤの歴史についての社会教育の場を提供する。
- 資料館は展示準備作業及び完成後の資料収集・調査活動にもとづきアユタヤ史に関する情報センターの機能を果たす。
- 資料館は将来において、タイ国内及び国外の教育・研究機関との協力によってアユタヤ史に関する広範な研究活動を振興し、組織する機能を果たす。

又本歴史資料館の展示内容は、綿密な研究によって解明された歴史的事実に基づくアユタヤ時代の社会、経済、外交、文化等のすべての側面にわたる内容及びアユタヤ地域の人々の民族文化の諸相をも展示の中にもり込む。そのために展示は以下の四つの主要テーマに沿って構成される。

テーマⅠ 首都としてのアユタヤ

- i. アユタヤ
- ii. 王宮
- iii. ワット・チャイ・ワッタナラーム
- iv. ワット・ナー・プラ・メン
- v. エレファント・クラール
- vi. ワット・マハー・タート
- vii. ワット・ヤイ・チャイ・モンコン

テーマⅡ 港町としてのアユタヤ

- i. 国際港としてのアユタヤ
- ii. アユタヤ港のすがた
- iii. アユタヤをめぐる貿易
- iv. 外国人との関係

テーマⅢ 中央集権国家としてのアユタヤ

- i. インドラ・ピセーク
- ii. 前アユタヤ国家
- iii. 王権と官僚制
- iv. 国家と社会: 社会的統一性

テーマⅣ アユタヤの村の生活

- i. 農民社会の生活
- ii. ライフ・サイクル 1
- iii. 家の内部
- iv. 農耕
- v. 災禍
- vi. ライフ・サイクル 2

上記の機能、活動内容及び展示内容を満たすために下記の施設の内容・規模及び機材を設定した。

施設

● 展示スペース	990 m ²	テーマⅠ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ 将来の増築の可能性を考慮 講義室、企画展示に使用 情報センター、図書室を含む
● 収蔵関係諸室	300 m ²	
● 多目的ホール	150 m ²	
● 管理関係諸室	260 m ²	
● 廊下、階段、便所等	230 m ²	
● 機械室	70 m ²	
	計2,000 m ²	

機材

- ビデオシステム
- オーバーヘッドプロジェクター
- 複写機
- カメラ、及び暗室用機材
- タイプライター3台
- 製本機
- 車両

本歴史資料館の建設用地は、アユタヤ県の旧日本人町跡地、敷地面積11,200 m²の内にある。考古学上の観点から敷地の西側約3分の1及び中心の歩道を含む巾8mの東西にわたる部分は、遺跡として保存し、中心の歩道を除く敷地東側約3分の2を歴史資料館の建設用地として利用することが、教育省芸術局との間で確認された。

敷地の盛土、整地工事は工事着工予定である1988年1月までには完了することが、また電力、電話は、工事完成予定までに供給されることが現地調査時点において確認された。

本計画に必要な事業費は総額約11.14億円(日本側負担分約9.99億円、タイ側負担分約1.15億円)と見込まれる。

本資料館の運営については、アユタヤ県が行う。アユタヤ県は、県知事の下にエグゼクティブボード及びアカデミックコミッティーを設置し、本資料館の円滑な運営を図ることとしている。また本資料館完成後の維持管理費は年間約1.5百万バーツと見積もられる。

本計画の実施により、歴史資料館の活動を通じて、タイ国民に社会教育の場を提供するのみならず、人類の歴史的遺産であるアユタヤ文明の研究に寄与するものであると考えられ、本歴史資料館を設立することの意義が大きく、本計画が日本国政府の無償資金協力によって実現した場合、タイの教育・文化に大きく貢献し、多大な援助効果をもたらすものと期待される。

目 次

序文
地図
要約

第1章	緒論	1
	1-1 要請の経緯	1
	1-2 事前調査団の派遣	2
	1-2-1 第一次事前調査団の派遣	2
	1-2-2 第二次事前調査団の派遣	2
	1-3 基本設計調査団の派遣	6
	1-3-1 第一次基本設計調査団の派遣	6
	1-3-2 第二次基本設計調査団の派遣	7
第2章	計画の背景	8
	2-1 タイ国における歴史教育の現状	8
	2-1-1 国家社会経済開発5ヶ年計画における教育関連政策	8
	2-1-2 タイの教育制度	8
	2-1-3 タイの歴史教育	9
	2-2 タイ国における博物館の現状	11
	2-2-1 タイにおける博物館	11
	2-2-2 タイにおける博物館の現状	13
	2-3 アユタヤの歴史、文化遺産	15
	2-3-1 アユタヤの歴史	15
	2-3-2 アユタヤの文化遺産の保護と現状	16
第3章	計画の内容	17
	3-1 計画の目的	17
	3-2 アユタヤ歴史資料館の機能及び活動内容	18
	3-3 展示テーマ	19
	3-4 組織と人員配置	21
	3-4-1 組織	21
	3-4-2 人員配置	22
	3-5 必要な施設と機材	23
	3-5-1 必要な施設内容	23
	3-5-2 必要な機材内容	24

第4章	基本設計	25
	4-1 展示基本計画	25
	4-1-1 基本方針	25
	4-1-2 展示構成	26
	(1) 展示コンセプト	26
	(2) 展示構成リスト	29
	4-1-3 展示構成概念図	39
	4-1-4 展示諸技術計画	40
	(1) 解説計画	40
	(2) 造形物計画	40
	(3) 映像・音響計画	42
	(4) 空間演出計画	43
	(5) 配布物計画	44
	4-2 施設基本計画	45
	4-2-1 計画地の概要	45
	4-2-2 設計方針	48
	4-2-3 基本計画	49
	(1) 敷地利用計画	49
	(2) 建築計画	50
	(3) 構造計画	53
	(4) 設備計画	54
	4-3 基本設計図	61
	4-4 維持管理計画	78
	4-4-1 運営計画	78
	4-4-2 維持管理計画	79
	4-4-3 維持管理費の試算	82
	4-5 事業実施計画	84
	4-5-1 実施体制	84
	4-5-2 工事区分	86
	4-5-3 施工計画	88
	4-5-4 全体工程	91
	4-6 概算事業費	93
第5章	事業評価	94
第6章	結論と提言	95
	6-1 結論	95
	6-2 提言	96

資料編

I.	協議議事録	I - 1
1.	第一次事前調査	I - 1
2.	第二次事前調査	I - 6
3.	第一次基本設計調査	I - 19
4.	第二次基本設計調査	I - 28
5.	ドラフトファイナルレポート説明調査	I - 40
II.	調査団の構成	II - 1
III.	調査日程	III - 1
IV.	面談者リスト	IV - 1
V.	ポーリングデータ	V - 1
VI.	基本設計検討案	VI - 1

第1章 緒論

第1章 緒論

1-1 要請の経緯

タイ国政府は第5次国家経済社会開発5ヶ年計画(1982~1986年)において教育の量的拡大から質の向上、社会教育・生涯教育の強調、文化保存の推進等に力点を置いた教育政策をとってきた。又今年から始まった第6次5ヶ年計画(1987~1991年)においても、生涯教育、人生と社会のための教育、伝統文化と近代文化の融合等に重点を置いた教育政策をかかげている。

伝統文化の教育の場のひとつとして博物館があるがタイにおける博物館の現状は、一般的に遺物、出土品、骨董品の展示が主で歴史的に古いもの、貴重なものが展示されているが、展示解説は少なく小、中学生及び一般の見学者に対して展示物をわかりやすく見せ、展示内容を理解させるという面から十分整備されているとはいえない。

タイの長い歴史の中でも1350年から1767年までの417年にわたるアユタヤ時代は、社会、経済、文化、外交面において重要な時代のひとつである。そのアユタヤ時代の歴史的価値のある遺物や発掘品の大半は国内、国外へ散逸してしまっている。

このため、綿密な研究によって解明された歴史的事実にもとずき、アユタヤの歴史について近代的展示技法・技術をもって再現することは、伝統文化教育の振興にとって意義のあることとの認識が広がった。

このような背景のもとで、タイ国政府はアユタヤの歴史を国民に正しく理解させ、知識を深めるための教育の場としてアユタヤ時代のゆかりの地のひとつである旧日本人町跡地に、歴史資料館の建設を計画し、1986年5月本歴史資料館建設計画の実現のため我が国政府に対して無償資金協力の要請を行った。

1-2 事前調査団の派遣

1-2-1 第一次事前調査団の派遣

日本国政府はタイ国政府の要請に応え、本計画に係る事前調査を実施することを決定し、国際協力事業団が1986年8月17日より8月27日まで外務省経済協力局無償資金協力課 課長補佐 吉田雅治氏を団長とする第一次事前調査団をタイ国へ派遣した。調査団は、タイ国政府関係者と協議し、本計画要請の背景及び内容を確認した。

調査の結果、①本計画の実施体制②施設建設予定地に係る使用土の問題、考古学上の問題③展示の内容、方法に係る基本構想等につき早急に検討するようタイ側に提言した。又本計画は、タイ国民及び諸外国人に対しアユタヤ時代の歴史に関する正確な知識を展示を通して提供し、もって社会教育の発展に貢献することを目的とすることを双方が確認した。

その後、タイ側は、1987年9月26日にタイ・日修好百周年を迎えることから、「タイ・日修好百周年記念委員会」(委員長ソンマイ泰日協会会長、前大蔵大臣)を1986年12月23日の閣議で正式に承認し、同委員会のもとに本計画の推進母体として「アユタヤ小委員会」を設置した。アユタヤ小委員会は、チャイワット・アユタヤ県知事を委員長とし、行政、学会などから25名で構成され、この内11名よりなるタスクフォース(委員長パイシット内務省常任法律顧問)が設置された。タスクフォースは、我が国からの調査団受入機関として機能することとなった。アユタヤ小委員会は、1987年1月に第1回会合を開催し、建設予定地に係る問題、展示基本構想等について検討するとともに、我が国に本資料館建設に係る調査団派遣の早期実施を要請してきた。

1-2-2 第二次事前調査団の派遣

上記のタイ側の準備状況、要請を踏まえ、国際協力事業団は、1987年1月21日より1月30日まで、外務省経済協力局無償資金協力課 真鍋 寛氏を団長とする第二次事前調査団をタイ国へ派遣した。

タイ側アユタヤ小委員会及びタスクフォースとの協議を通じて確認された本計画の内容は以下の通りである。

① 名称:

アユタヤ歴史資料館建設計画

② 実施機関 : アユタヤ県、内務省及び教育省。これに泰日協会が協力。

なお施設完成前はアユタヤ小委員会がタイ側の本計画推進母体となり、実質的な協議は同委員会の下でタスクフォースが推進する。

また施設完成後はアユタヤ県知事を責任者とし、その下に知事

を補佐するために、内務省、教育省芸術局、学者及び泰日協会のメンバーで構成するエグゼクティブボードが本計画の運営につき助言する。

- ③ 建設予定地： アユタヤ市内から約2kmの地点に位置する泰日協会所有の旧日本人町跡地約11,200m²の一部。この敷地のうち考古学上問題ないと教育省芸術局が判断した部分が施設の建設予定地として特定された。なお、泰日協会は、アユタヤ県が資料館用地として使用することに同意している。

- ④ 本計画の目的： アユタヤ歴史資料館設立の目的は以下の3点である。

- 資料館はタイ国民及びそこを訪れる外国人に対し、展示と資料館の諸活動を通じてアユタヤの歴史についての社会教育の場を提供する。
- 資料館は展示準備作業及び完成後の資料収集・調査活動にもとづきアユタヤ史に関する情報センターの機能を果たす。
- 資料館は将来において、タイ国内及び国外の教育・研究機関との協力によってアユタヤ史に関する広範な研究活動を振興し、組織する機能を果たす。

- ⑤ 展示基本構想(仮)

本歴史資料館は、綿密な研究によって解明された歴史的事実にもとづき、アユタヤ時代(1350～1767A.D)の対外交渉、社会、経済、文化等のすべての側面にわたる展示を行う。また同時に、アユタヤ地域の人々の生活を歴史的連続性の中で理解するために、今日見られる民俗文化の諸相をも展示の中にもり込む。これらの目的を果すため、資料館の展示は以下の三つの主要テーマに沿って構成され、さらにいくつかのトピックスに分けられる。

1 交易都市としてのアユタヤ

14世紀から18世紀にいたる国際的交易都市としてのアユタヤの繁栄の姿をタイ史料や諸外国の資料にもとづいて浮きぼりにする。

- 1) アユタヤと諸外国の交渉: 中国、日本、イスラムの諸民族、ビルマ、ラオス、クメール、ヴェトナム、マレーとの関係; ポルトガル、オランダ、イギリス、フランスなどヨーロッパ諸国との関係
- 2) 外国人居留地: 日本人町、オランダ人町、ポルトガル人町等
- 3) 交易のシステム: 諸外国との交易、国内交易、港湾の構造・施設

[展示資料]

対外交渉史のチャート、外国人居留地を示すアユタヤ都市プラン、古地図、通貨(子安貝、銀貨など)、交易品(鹿皮・サメ皮、漆、蘇木、錫、陶器)、各タイプの外洋航行船舶のモデル(中国型ジャンク船=日本の朱印船もその一つ、ダウ船、西洋型帆船等)

2 中央集権国家としてのアユタヤ

アユタヤは国際的交易都市であるばかりではなく、タイ史上初めて出現した中央集権的な統治システムを備えた国家であった。ここではアユタヤ国家の社会・経済・軍事の諸機構、さらに王権と仏教に関する展示が行われる。

- 1) アユタヤ以前の諸国家: ロブブリー、ナコーンパトム、スコータイ、チェンマイ他
- 2) 王権と仏教: アユタヤにおける大伝統の諸相
- 3) 官僚システム: 中央・地方行政機構および身分制度
- 4) アユタヤ時代の戦争

[展示資料]:

アユタヤ前国家の都市プラン・地図、現在の航空写真、同時代ヨーロッパ人の図版(王、貴族、王宮、仏教)、アユタヤ王宮のモデル、玉座のモデル(Phrathinang Sanphet Prasat内玉座の復元)、説法台のモデル、寺院壁画のレプリカ、官僚システムのチャート、三印法典他歴史文書、大砲等兵器

3 アユタヤの生活文化: 都市と農村

アユタヤ時代の都市と農村の文化の諸相を描くとともに、現代のアユタヤ地域の人々の民俗文化との歴史的連続性をも示す展示を行う。

- 1) 都市と農村の生活: 農村、都域内の産業地区、外国人居留地、市場、農作業
- 2) 儀礼と祭り: 仏教儀礼・祭り、スピリット儀礼、ボート・レース、テート・マハーチャート、ソングラーン祭、ゲーム、音楽他
- 3) 文字文化(リトラシー)と文学: 寺院における読み書きの習得、文学の諸ジャンル

[展示資料]:

都市と農村の生活場面のモデル、各種住居のモデル、農具、漁具、牛車、舟、調理器具、各種生活用具、楽器、民俗文化を示す寺院壁画のレプリカ、写真、貝葉文書、コーイ折本文書、仏教祭祀具

各テーマごとの展示とともに、それらを統合的かつ象徴的に示すアユタヤ都市の大規模モデルをメインホールに展示する。この都市モデルは個別的トピックのすべてを網羅して盛りこむものではないが、主要な三つの展示テーマのコンテキストを十分に反映するものでなければならない。モデルはアユタヤ都域内とその周辺地域をカバーするものであり、河川・水路・地形など自然地理的な要素をベースとしながら、運河・城壁・とりで・港湾施設・宮殿・寺院・各居留区・税関などの文化的景観を歴史地理的考証にもとづいて、できるだけ正確に復元する。

以上の結果、この歴史資料館はアユタヤ史の研究実施のみならず、社会教育の場を提供するという意味でタイの社会にとって有益のみならず、タイの他の類似機能をもっている教育学術機関にとっても良い参考例となるパイオニア的プロジェクトとなることが確認された。

1-3 基本設計調査団の派遣

1-3-1 第一次基本設計調査団の派遣

2回にわたる事前調査の結果を踏まえ、日本国政府は本計画に係る基本設計調査を実施することを決定し、国際協力事業団は1987年4月5日から同月25日までの期間(展示に関しては1987年3月25日より同年5月31日まで)、外務省無償資金協力課首席事務官 花田吉隆氏を団長とする第一次基本設計調査団を現地に派遣した。調査団はアユタヤ小委員会及びタスクフォースとの協議、現地調査、資料収集を実施した。

タイ側は歴史資料館の展示に関し学術的観点から調査団に指示及び助言を与えるために新たにタスクフォースのもとに「タイ学術委員会」を設置し、調査団と詳細な協議を行った。又、本計画は建物自体が文化的施設であり、そのデザインに関してもタイの建築家の助言が必要であることが双方で確認された。

第一次基本設計調査の主な協議内容、確認事項は以下の通りである。

- 展示概要の設定

展示概要について、第二次事前調査の結果確認された3テーマ(① 交易都市としてのアユタヤ ② 中央集権国家としてのアユタヤ ③ アユタヤの生活文化-都市と農村-)を統合するテーマとして「首都としてのアユタヤ」を設けることとした。

テーマI	首都としてのアユタヤ
テーマII	港町としてのアユタヤ
テーマIII	中央集権国家としてのアユタヤ
テーマIV	アユタヤの生活

- 施設の内容及び規模の概定

本資料館の施設内容として以下のものを設けることが確認された。

展示ホール、多目的ホール、倉庫、管理部門、機械室、その他

- 必要機材の概定

本資料館の機材として以下のものを設置することが確認された。

ビデオシステム、スライドプロジェクター、複写機、カメラ

- 双方工事分担範囲の確認

- 全体工程の想定

調査団とタイ側との協議の結果得られた基本的な合意事項は1987年4月13日付協議議事録にとりまとめた。

1-3-2 第二次基本設計調査団の派遣

第一次基本設計調査の結果に基づき国際協力事業団は1987年7月2日より同月8日までの期間(展示に関しては1987年6月23日より同年7月15日まで)、国際協力事業団無償資金協力計画調査部基本設計調査第二課課長代理 中村 俊男を団長とする第二次基本設計調査団を現地に派遣し、タイ側タスクフォース、学術委員会及びタイ建築家との協議を行った。

第二次基本設計調査の主な協議内容、確認事項は以下の通りである。

- タイ側の実施体制及び維持管理体制の確認
 - (i) 本資料館建設に係る担当組織はアユタヤ県知事室 (Office of Ayutthaya Provincial Governor) とする。
 - (ii) 本資料館に係るエグゼクティブ・ボードは、アユタヤ県知事を長 (Chairman) とし、アユタヤ県職員、教育省芸術局職員、学術委員会委員、泰日協会メンバーから構成し、本資料館及び周辺のタイ側が整備する施設の管理を行う。
- 展示テーマ及びサブテーマの基本設計とりまとめ案の設定
展示テーマについて、第一次基本設計調査団派遣時に確認されたテーマに基づき、サブテーマを確認した。なお、テーマIVについては、「アユタヤの村の生活」とすることで了解を得た。
- 敷地のマスタープラン及び建物コンセプトプランの設定
タイ側建築専門家の助言を得て、敷地全体のマスタープラン及び資料館の基本的内部配置図について合意すると共に資料館全体の建築様式について、検討した。

調査団とタイ側との協議の結果得られた基本的な合意事項は1987年7月7日付協議議事録にとりまとめた。

本報告書は、タイ国関係者との協議結果、現地収集資料等をもとに、本計画の実施に最適な基本設計を検討し、その結果をとりまとめたものである。協議議事録、調査団の構成、調査日程、面談者リスト、タイ・日修好百周年記念委員会名簿、アユタヤ小委員会名簿、タスクフォース委員会名簿、学術委員会名簿等は、巻末の資料編に添付した。

第2章 計画の背景

第2章 計画の背景

2-1 タイ国における教育の現状

2-1-1 国家社会経済開発5ヶ年計画における教育関連政策

タイ国政府は第4次計画から第5次計画においていずれも自国の伝統文化の尊重及び地域における社会教育の拡充を教育の重点項目にしている。第4次計画から第5次計画における教育関連政策、及び1987年から始まった第6次計画の項目を下記に示す。

1) 第4次計画(1977~1981)、第5次計画(1982~1986)

- 1977年国家教育計画を新たに策定(1978年から実施)
- 6・3・3制、6年間の義務教育、新カリキュラムの実行(1978, 1981)
- 社会(制度外)教育、生涯教育の強調
- 人生と社会のための教育
- 国家の社会経済開発の手段としての教育
- 教育の量的拡大から質的向上の強調
- 民主主義と平等の強調
- 文化保存の推進

2) 第6次計画(1987~1991)

- 科学、技術、社会発展、文化、道徳を統合するためのカリキュラムの適応
- 教育への地方、民間施策動員
- 伝統文化と近代文化の融合
- 工業化、地方開発及び機会均等のための教育の強調
- 人生の質の向上

2-1-2 タイの教育制度

現在のタイの教育制度は1977年、国家教育計画が新たに策定され、制度、カリキュラムなどに画期的ともいえるべき改革がなされ、現在に至っている。その学校制度は次の様な6・3・3・(4)制である。

	初 等 学 校						中 等 学 校			高 等 専 門 学 校			専 門 教 育			
										職		職				
							高 等 学 校			大 学						
グレード	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
標準年令	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22

義務教育となっている初等教育の就学率は98.08%となっており、学令人口のほとんどが受けている。

中等教育は、前期(中学校)で35.12%、後期(高等学校)で26.01%の就学率となっている。(出所: Educational Statistics Handbook 1984年)

他方、学校制度外教育(Non-formal Education)も正規の学校制度の枠外で活発に組織されており、問題解決における人々の能力を育成し、又関心のある特別な知識や情報を与えるものとして、生涯教育の一環に位置づけられている。

2-1-3 タイの歴史教育

タイの歴史教育(タイ史)は初等教育から始まる。一科目としてははっきりと「歴史」の学科が分れてはいないものの、「サーンサームプラソブカーンチーウィット」という、日本の初等教育の「社会」の要素と「道徳」の要素を兼ね備えた教科で扱われている。(※タイでは、教科をその教科書名で呼ぶ。)義務教育たる初等教育(Grade 1~6)における歴史教育は、歴史的事項においては基本的なトピックの紹介にとどまる。

例としてGrade 3における教育省出版の「サーンサームプラソブカーンチーウィット」(1987年)の歴史に関する項目は以下の通りである。

第23課 トンブリ王朝の創始者

第24課 ラタナコーシン王朝の王

中等教育(Grade 7~9)に入るとより詳細な歴史教育が展開される。

例としてGrade 7における教育省出版の「プラテートコンラオ」(「私たちの国」、1987年)の歴史に関する項目は以下の通りである。

第1章 タイ国

— タイ国家の軌跡

第1課 タイ国とその発生

第2課 領土確立の始まり

第3課 スコータイ王国と民族の結集

又、因みにGrade 8におけるアユタヤに関する歴史教育の内容は以下の通りである。

- (1) アユタヤ中央集権システム
 - アユタヤの歴史を学ぶ意義
 - アユタヤ王朝の基礎
 - アユタヤ王朝の行政システム
- (2) アユタヤの社会、経済状況
 - 社会
 - 経済状況
- (3) アユタヤの文化
 - 芸術
 - 文学
 - 仏教
- (4) アユタヤと諸外国との関係
 - 交流の基本的特徴
 - アジア諸国との関係
 - 西欧諸国との関係

教育方法としては教科書、参考書による授業が主で、見学や研修等はあまり多くはみられない。従ってタイの歴史を正しく興味深く国民に理解させることは、タイの歴史教育の上でも大切なことであり、そのために必要な施設の整備が望まれている。

2-2 タイにおける博物館の現状

2-2-1 タイにおける博物館

タイ国における人文系の国立博物館は大きく4つに分類できる。

(1) 寺院の文化財を収集している寺院博物館

ここに分類できる博物館は以下の通りである。

博物館名	所在地
ワットプラチェートウボン博物館	バンコク
ワットベンチャマボーピット博物館	バンコク
ワットマハータート博物館	スラタニ県チャイヤー郡
マハーウィラウオンワット スチンダー博物館	ナコンラーチャシーマー県
インタブリーワットポー博物館	シンブリ県
プラバトムチェディー博物館	ナコンパトム県
ワットブラマハータート博物館	ナコンシータマラート県
ワットブラタート ハリブンチャイ博物館	ランプーン県
ワットマチニマワート博物館	ソクラー県
チャイナートムニーワットプラ プロムタート博物館	チャイナート県
ワットプラタートラムパーン ルワン博物館	ラムパーン県

(2) 遺物を収集し、芸術局によって遺跡地に建てられている博物館

この種の博物館は芸術局が各地の遺跡を調査し、修復作業を行った時点で数多く発掘された美術品、遺物などを展示している。芸術局は国民が美術、文化、歴史、考古学についての教養を深め、タイ国民としての誇りを培うことのできるよう、これらの文化遺産を保護する場所として以下の博物館を建設した。

- チャオサムブラヤー博物館(アユタヤ県)

芸術局が磚仏(せんぶつ:小さい仏像)を販売し、そこで得た利潤を建設費用の一部として建設した。現代の展示設備がはじめて適応された博物館である。

- ラーマカムヘン博物館(スコタイ県)
芸術局が磚仏(せんぶつ:小さい仏像)を販売し、そこで得た利潤を建設費用の一部として建設した。
- ウートン博物館(スパンブリー県)
ドバーラバティ時代の遺物を展示している。
- カムベンペート博物館(カムベンペート県)
スコタイ、アユタヤ時代の遺物を展示している。
- バーンガウ博物館(カンチャナブリー県ムアング郡チョーラケブアク区)
考古学の分野の展示がある。
- プラバトムチェディー博物館(ナコンパトム県)
ナコンパトムはドバーラバティの時代の考古学的に重要な都である。ここではプラバトムチェディーの布薩堂の一部を博物館に当てている。
- バーンチェン博物館(ウドンタニ県ノーンハーン郡)
色彩のある土器を展示している。
- ワンチャンタラカセーム博物館(アユタヤ県)
チャンタラカセーム宮殿を博物館としている。
- ソムデートプラナライ博物館(ロップブリー県)
プラナライ王の宮殿を博物館としている。
- プラナコンキーリーベッチャブリー(ベッチャブリー県)
プラナコンキーリー宮殿を博物館としている。

(3) 地方博物館

遺跡に建てられている博物館以外に芸術局は、美術文化、歴史学、考古学分野の研究を奨励し、地方博物館がその地域の住民の文化の中心となることを意図して以下の博物館を建設した。

コンケン博物館	(東北部地方コンケン県)
チェンマイ博物館	(北部地方チェンマイ県)
ナコンシータマラート博物館	(南部地方ナコンシータマラート県)
プラチンブリー博物館	(東部地方プラチンブリー県)
バンコク国立博物館	(中部地方バンコク市)

(4) 県立博物館

ラムプーン博物館	(ラムプーン県)
サワンカローク博物館	(スコタイ県)
ソンクラー博物館	(ソンクラー県)
ナーン博物館	(ナーン県)

(5) その他の博物館機関

芸術局は、民俗、美術に関する施設を充実するため、さらに以下の2つの機関を設ける計画がある。

- 国立民俗博物館
- 国立美術館

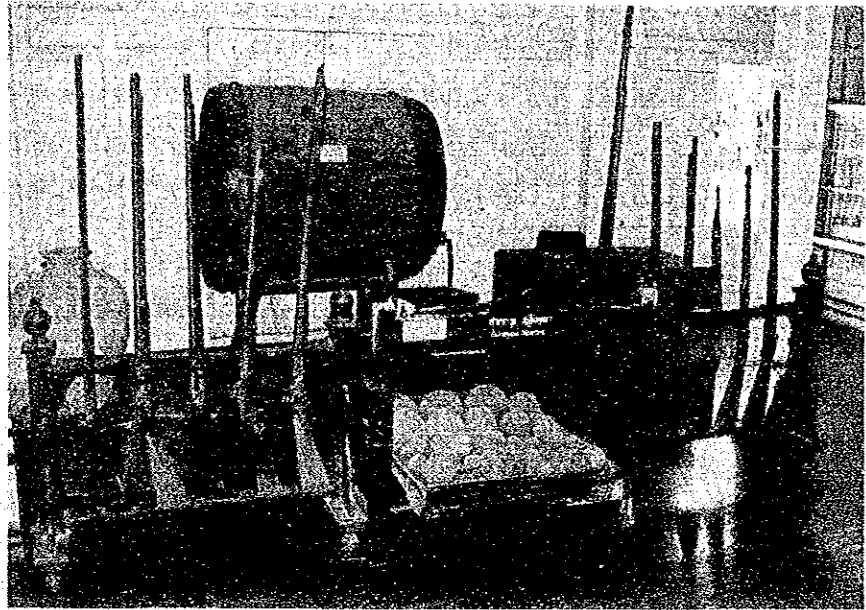
2-2-2 タイ国における博物館の現状

タイにおける人文系の博物館の現状は概ね以下の様である。

- 遺物、出土品、骨董品の展示が主で“古いもの、貴重なもの”が展示されているがそれに対する解説が少ない。
- 施設が不備で老朽化しており、陳列品の保存状態は必ずしもよくない。
- 展示手法も実物、標本展示が主で、模型、図表、写真、映像などによるビジュアル展示の手法が不十分である。
- 常設展示が主で、特別展示(随意展示)等の企画が少ない。
- 一般の見学者以外に小、中学校の授業の一環や課外教育活動の一つとしてよく利用されているが、教育、調査研究の機能が必ずしも十分でない。
- 情報がほとんど収集、整理されておらず、博物館相互の連携が少ない。



(チャオサムプレイヤー博物館)



(ワンチャントラカセム博物館)

2-3 アユタヤの歴史、文化遺産

2-3-1 アユタヤの歴史

タイ国の主要民族であるシャム族(狭義のタイ族)が、独立国家として歴史の舞台に登場するのは13世紀前半のことである。この頃中国でのモンゴル民族の動きに連動してか、タイ族の支派であるアホム族、シャン族、シャム族、ラーオ族などは、続々と国家形成を始めている。タイ族は稲作民族であり、長い年月をかけて、稲作適地を求めてゆるやかに移動した。チャオプラヤー大平野を支配したシャム族がタイ族のなかで最強国家へと発展したのも、その自然条件によるものといえよう。

この大平野に定着した民族は、文献で確認できる限りでは、モン族がいちばん古い。モン族の国の1つの強国にドバーラバティがあるが9世紀以後、クメール族の勢力に駆逐される。アユタヤで発見された10世紀の一刻文によると、当時のアユタヤは文化的にはクメール族の影響を受けていたことがいえる。

12世紀初期、チャオプラヤー河中流域には、既に多数のシャム族がそれぞれ部族国家を形成して、クメール族の帝国アンコールに服属していた。13世紀初期にシャム族の土候国がスコタイからクメールの太守を駆逐した。このスコタイ王朝は三代目のラーマカムヘン王のとき勢力圏が急激に拡大し、13世紀末から14世紀初頭にかけて繁栄を見せるが、1438年、南方に勃興した新しいシャム族の国アユタヤに併合される。

アユタヤは、14世紀の半ば、その近傍にあった古都アヨダヤを発展的に継承して興った。アヨダヤは11世紀、クメール人によって建設されたとされている。アヨダヤは13世紀から14世紀の前半に、かなり高い文化を保持しており、その文化を支えるほどの経済的発展段階にあったと考えられる。「ルアン・プラースト本年代記」には、アユタヤ建設の4半世紀も以前に、パネンチューン大仏が建立されたという記事がある。この大仏の存在は、中国人町の存在に代表される商業的繁栄の傍証と考えることもできる。

フランスの史家G.セデスは、400年を超えるアユタヤ王国史を、4期に区分している。第1期(14世紀半ば~16世紀半ば)の約200年間は、軍事的手段による勢力圏の拡大と行政機構の整備とによって、アユタヤが東南アジア大陸部の一大国へと発展していく時期である。これを王朝史として眺めると、ラーマティボディを始祖とするウートーン王朝に続いてスパンブリ系のスワンナプーム王朝が立ち、再び第2次ウートーン王朝ついで第2次スワンナプーム王朝と、初期の半世紀は不安定な王家間の確執が続く。

アユタヤ王朝初期の段階から、首都アユタヤは、国際的色彩の濃厚な港町の性格をもっていた。ワットラーチャプラナの遺品には、アラビア語、中国語などの銘文があり、又、中国への朝貢もかなりの頻度をもって行われている。

セデスは16世紀後半の半世紀をアユタヤ王朝の第二期とする。この時期は度重なるビルマとの戦争の時代である。ビルマは、16世紀中期、ビルマ族のダビンシュエティ王によって統一されている。ビルマとアユタヤとの確執にはアユタヤの外港にあたるベンガル湾沿岸諸港市における商権の争奪があったと見ることが出来る。1569年8月首都アユタヤはビルマ軍によって奪取され、スワンナプーム王朝は滅亡した。ビルマ王バインタウンは、スコータイ王家の血統を継ぐピサヌローク太守のタンマラーチャーをアユタヤ王に任じているがその嫡子ナレースエン大王はビルマ軍を撃退し、ベンガル湾貿易に対するアユタヤの商権も回復した。

ナレースエン大王の王弟エーカトツサロットに始まる17世紀は、ヨーロッパ人の登場によって、外国との関係が多様化した時代と見られる。セデスはこれをアユタヤ史の第三期としている。16世紀にはアユタヤはポルトガル、スペインと条約を結んでいたが、17世紀に入るとオランダ人、イギリス人の商業活動が始まり、これにカトリックの布教をめざすフランスが加わった。オランダ、イギリスは17世紀初期にはアユタヤ商館を開設している。日本からも御朱印船が多数訪れている。アユタヤ城外には日本人町も形成され1500人もの日本人が居住していたという。

アユタヤ王朝史の第四期は、バーン・ブルルアン王朝の80年である。この王朝は18世紀前半から中葉にかけてボロマコート王の治世において豊かに繁栄した。文芸は黄金時代を迎え、仏教は盛行する。しかし、1752年、アラウンバヤが、モン族を制圧して全ビルマを統一すると、アユタヤは再び西方からの脅威にさらされた。1767年、ビルマ軍によってアユタヤ王国は滅亡した。

2-3-2 アユタヤの文化遺産の保護と現状

近年、教育省芸術局が国内各地で遺跡発掘調査を行い、さらに博物館の設立も奨励している。これは、国民の歴史、文化的知識を高め、タイ国民たる誇りを培わんことを意図したものである。アユタヤにおいても、この方針を基に調査が行われている。特に、アユタヤのランドマークたるワット・ヤイチャイモンコンでは、その復元作業はかなり進んでおり、ロイヤルパレスでも、現在発掘調査が継続中である。(一部貴重な美術品はバンコクの国立博物館におさめられている。)アユタヤの諸寺院から発掘された数々の美しい仏像、碑仏、あるいは、アユタヤ王朝文化の栄華を象徴する宝器、宝物は、チャオサムプラーヤー博物館とワンチャンタラカセーム博物館に収蔵されている。

